

# 商品関係と〈労働〉の抽象性(I)

岡 林 茂

## 目 次

はじめに

1. 商品関係と〈価値〉
2. 〈価値〉と〈労働〉——古典派の場合——
3. 商品の二要因と〈労働〉の「二面的性質」
4. 社会的＝平均的必要労働と抽象的人間労働
- 5— a. 抽象的人間労働の存在様相（以上本号）
- 5— b. 補足——算術例（以下次号）
6. 抽象的人間労働と貨幣——U. クラウゼへの疑問——
7. 暫定的結語

## はじめに

商品（＝貨幣）関係が人間＝社会関係にもたらしたものを〈労働〉の有り様に即して考察することが本稿の課題である。

経済学は商品（＝貨幣）関係の発展＝拡大と共にその歩を進めてきた。商品（＝貨幣）関係の発展＝拡大は同時に社会の不透明性の増大の過程でもあった。不透明性の増大とは、無論、伝統的な共同体社会との対比において、という意味である。財の需要と供給のバランスの問題一つとってもそのことは明らかである。この不透明性の増大が経済学の登場を促した、と言ってもいい。ことは善悪の問題ではなく必然性の問題である。人間＝社会の物質的豊かさと効率性＝利便性の追求の不可避免的な進展が商品（＝貨幣）関係を呼び込み膨化させてきたのである。その過程は伝統的共同体間の交通の拡大であり、狭い共同体の枠を越えての人々の生活の結びつきの拡大であり、さらには共同体の枠の溶融＝再編成をもたらした。諸個人によって直接的に統括できる範囲の急激な

## 商品関係と〈労働〉の抽象性（Ⅰ）（岡林）

縮小過程であり、加速度的に拡大する〈世界〉に比して人々はますます〈点的な存在に近づく。不透明性の増大とは、ここでは、〈量〉的なそれである。ひとたび呼び込み膨化した商品（＝貨幣）関係は、しかしながら、同時に、その独自の論理でもって人間＝社会のその他の構成要素を従属する動きを示したし、示しつつある。〈文化〉、〈政治〉、〈法〉、そして〈自然〉までもがそれに規定されて存在している。そこには、いわば、〈質〉的な不透明性の増大とでも①  
① いうる事態の進展がある。

ふたたび言い直せば、経済学は、この商品（＝貨幣）関係の持っている〈質＝量〉論理の究明をその最大の原理的課題とするものである。財一般ないし消費される目的で保有される財と商品（＝貨幣）とを明示的に②  
② 区別して論じたのは K. マルクス、C. メンガー、K. ポランニー等であるが、その他の論者も商品（＝貨幣）のフィルターを通して財とそれをめぐる〈生産〉、〈交換〉、〈分配〉、〈消費〉、〈廃棄〉の諸過程を結局は分析の対象としているし、又、せざるをえないのである。重商主義者たちと A. スミス、マルクス学派と限界学派、新古典派と J. M. ケインズ、アメリカ・ケインジアンとイギリス・ケインジアン（ネオ・リカードィアン）等の諸確執はこの論理の社会における貫徹様式の認識をめぐって存在したと言っても過言ではない。個と全体、富とその偏在、価値と商品（＝貨幣）所有者たちの心理・動向、市場経済の長期的均衡と短期的不安定性（景気循環）の深度とのバランス、等々の諸論点は商品（＝貨幣）の論理がもたらす不可避的システムが〈自然—人間—社会〉との間に産出する連関と矛盾（不安定性）と、さらには、その解決の方途に関連して設定されているのである。

本稿では、経済学の原理的課題の一端を明らかにする目的のもとに、商品（＝貨幣）関係と労働の存在様式、ならびに、〈労働〉概念の特殊＝歴史性を照射してみたい。

## 注

- ① 〈政治〉的情念・利益と〈経済〉的情念・利益との確執・相互浸透・調和、すなわち〈秩序〉をめぐる17～18世紀の思想界の混乱と A. スミスによるその收拾の過

程を分析しているハーシュマンの論稿は、商品（＝貨幣）関係の人間＝社会への浸潤による不透明性の拡大のもたらす諸問題を象徴的に明らかにしている。

（A. O. Hirshman, *The Passions and the Interests, Political Arguments for Capitalism before Its Triumph*, Princeton University Press, 1977. 佐々木 毅／旦 祐介訳『情念の政治経済学』法政大学出版局, 1985年）

- ② K. Marx, *Das Kapital*, 1867-94. C. Menger, *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, 1871, 2 Aufl. 1923. K. Polanyi, *The Great Transformation, The Political and Economic Origins of Our Time*. 1944.

## 1 商品関係と〈価値〉

以下、商品（＝貨幣）関係と〈労働〉との絡み合いを検討するが、貨幣それ自体は意識的に捨象し、商品と商品との関係をまずは分析の対象として取り上げる。貨幣は商品と商品との交流の内に特殊な商品として胚胎してくるものという立場に我々はたっているからである<sup>③</sup>。

A商品  $x$  量＝B商品  $y$  量という二商品の交換関係において、何が表現され、何が実現しているのか。答えは二つある。一方は、A商品所有者のB商品に対する（または、B商品所有者のA商品に対する）欲望の度合いが表現され、欲望対象の獲得の実現が示されている、とするものである。他方は、A（B）商品の価値がB（A）商品の使用価値の一定量で表現され実現されている、とするものである。商品関係を考察する際にどちらの解答がより重要であろうか。

前者は、無論、誤りではないが、商品関係が商品関係であることの独自性がばやけてしまっている。財貨の移動による単なる欲望の相互表現＝実現はとりたてて商品関係として言挙げする体のものではない。伝統的な共同体の中であっても存在した分業を通じての諸構成員の生活の透明な相互補完的再生産とも重なるものである。そのような視角からでは我々が問題にしようとしている商品経済の不透明性という像をあぶり出すことはできない。欲望の相互表現＝実現という要因は、それ故、商品関係が充たすであろう一つの側面ではあってもその本質を明らかにするものではない。

我々が問題にしている二商品の交換関係は、商品関係が支配的な社会でのそ

## 商品関係と〈労働〉の抽象性（Ⅰ）（岡林）

れであって、相互の顔が見える伝統的社会での財貨の交流という事態ではない。商品関係が支配的な社会においては、人々は商品所有者としてはじめて一個の自立した個人としてその社会的存在が認知される。そして、商品とはもちろん他商品との交換を実現しなければ意味をなさない。ここにおいて商品の〈価値〉という概念が問題となってくる。後者の解答を吟味することが<sup>④</sup>、故に、より重要となってくるのである。

〈価値〉とは、商品所有者にとって、自己の存在の社会的有意義性を証明するものである。伝統的社会においては自己の社会的有意義性は生まれたときから既に与えられているが、商品関係が支配的な社会においては自己の所有している商品の〈価値〉を実証することによって始めて与えられる。商品関係が支配的な社会は、それ故、〈価値〉の実現＝実証それ自身が自己目的化する傾向を内蔵しているのである。二商品の交換関係に示されているように、商品の〈価値〉というものは〈交換価値〉（「ある一種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち割合」）としてひとまずは意識される。

「交換価値は…ある一種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち割合として現われる。それは、時と所によって絶えず変動する関係である。それゆえ、交換価値は偶然的なもの、純粹に相対的なものであるように見え、したがって、商品に内的な、内在的な交換価値<sup>⑤</sup>というものは、一つの形容矛盾であるように見える。」（K. マルクス）

一商品の〈交換価値〉は、さらに、多種類の他の諸商品との交換関係の中で他の諸商品の多様な諸使用価値でもって様々に表現されるのであり、その量的水準の明示化の不確定性を増幅する。商品（所有者）は、しかしながら、様々に表現される〈交換価値〉のその多様性＝不安定性＝不透明性の中を貫いて、一定量の〈価値〉を内属するものとしての自己を主張することによってその社会的アイデンティティを確保し、もって永続的な商品所有者、すなわち、供給者としての安定性の目安を得ようとする志向性を持つ。「独立に行なわれていて互いに依存し合っていない私的労働」＝「独立生産者の私事として互いに独立に営まれるいろいろな有用労働」、すなわち、個々ばらばらに、社会的には無

政府的＝無計画的に遂行される分業の生産物として市場で相対する諸商品は、だが、そのような志向性にもかかわらず、交換を通じて他商品の使用価値の一定量を手にいれることによってはじめて自己の存在の有意義性＝〈価値〉を社会的に承認されるのである。交換に先立って確認＝確保したい自己の社会的有意義性＝〈価値〉は、交換を通じてしか確認＝確保できない。多様に現象する〈交換価値〉の〈本質〉としての〈価値〉なるものを求める動きは、しかし、このジレンマを越えて進もうとする。次のようなマルクスの文言は、以上述べてきたことを踏まえつつ周到に読まなければならない。

「ある一つの商品は……いろいろに違った割合の他の商品と交換される。だから、小麦は、さまざまな交換価値をもっているのであって、唯一つの交換価値をもっているのではない。しかし、 $x$ 量の靴墨も $y$ 量の絹も $z$ 量の金その他も、みな1クォーターの小麦の交換価値なのだから、 $x$ 量の靴墨や $y$ 量の絹や $z$ 量の金などは、互いに置き替えられうる、または互いに等しい大きさの、諸交換価値でなければならない。そこで第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの同じものを表わしている、ということになる。しかし、第二に、およそ交換価値は、ただ、それとは区別される或る実質の表現様式、『現象形態』でしかありえない、ということになる。」

「商品の交換関係または交換価値のうちに現われる共通物は、商品の価値なのである。……価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値……。」（K. マルクス）<sup>⑥</sup>

各商品（所有者）が自己に内属する〈価値〉なるものを希求する場合、それを〈実体〉化して捉えようとすることは必然的な事態である。〈実体〉があつてこそその安定性が確保される道も開け、生産しようとしている商品に関しての効率性＝生産性の比較も可能となるからである。<sup>⑦</sup>

## 注

- ③ かといって、貨幣が経済に対して本質的な効果をなんらおよぼさないようなケインズが批判したワルラス的な実物交換経済を想定しているのではない。念のため。  
（M. E. L. Walras, *Éléments d'économie politique pure ou théorie de la richesse*

## 商品関係と〈労働〉の抽象性（Ⅰ）（岡林）

*sociale*, 1<sup>re</sup> éd., 1874-77, 5<sup>e</sup> éd., 1926. J.M. Keynes, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, 1936.)

- ④ これは独立小商品生産者＝自営業者についてのみにあつてのことではない。企業（＝組織）に所属することによって自己の社会的アイデンティティを認知されている人々もまた労働力という商品の所有者なのであり、さらには、当の企業も一定の商品を生産し供給することによってその社会的アイデンティティを確保しているのである。
- ⑤ Marx, op. cit., in Marx-Engels Werke, Bd. 23, S.50-51. マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳『資本論』大月書店、1巻1、49頁。
- ⑥ Ebd. S.51, S.53. 同上、50頁、52頁。
- ⑦ 効率性の比較とは次のような意味である。各商品生産者は、どのような商品の生産に従事するかを自分の判断で決めることができる。この判断の基準になるのが効率性である。機械A50台、布地100枚、労働200時間を投入して上着200着を製造する場合と、機械B30台、木材200枚、労働100時間を投入して椅子1000脚を製造する場合とを比較してその〈産出／投入〉効率を比較できなければ、どちらの生産に特化すべきか判断できない。〈価値〉の〈実体〉を希求する所以の一端がここにも示されている。

## 2 〈価値〉と〈労働〉——古典派の場合——

いわゆる古典派経済学者たちは、ここで、人間の〈労働〉を登場させてくるのである。

「…労働はいっさいの商品の交換価値の実質的尺度（＝真実の尺度 real measure）なのである。」

「…貨幣または財貨は、一定量の労働の価値をふくみ、われわれは…それらを等量の労働の価値をふくむと思われるものと交換するのである。労働こそは、最初の価格、つまりいっさいの物に支払われた本源的な購買貨幣（original purchase-money）であった。」

「…労働は価値の唯一の普遍的な尺度であると同時に、唯一の正確な尺度であるということ、すなわち労働は、いつでも、またどこでも、われわれがそれによってさまざまな商品の価値を比較できる唯一の標準であるということと…。」<sup>⑧</sup>（A. スミス）

「…商品について、その交換価値について、またその相対価格を左右する法則について論ずるばあいには、われわれは、つねに、人間の勤労のはたらきによって分量を増加させることができ、またその生産には際限なく競争がおこなわれるような、そのような商品のみを考えているのである。／社会の初期の段階においては、これらの商品の交換価値、すなわち、一商品のどれだけの分量が他の商品と交換に与えられるべきかを決定する規則は、ほとんどもっぱら各商品に支出された労働の比較量に依存する。」

「人間の勤労によって増加しえない物を除外するかぎり、これ〔労働〕が実際にすべての物の交換価値の根底（foundation）である、ということは経済学におけるもっとも重要な学説である…／…／…正確に交換価値の根源（original source）を定義し、そして、すべての物はその生産に投下された労働の多少に比例して価値が大となり小となることを首尾一貫して主張すべきで（ある）…。」（D. リカードウ）<sup>⑨</sup>

諸商品の〈価値〉の〈実体〉もしくはその究極の源泉を人間の〈労働〉に求めるという傾向が、スミスならびにリカードウという、いわば古典派の代表的論客において、〈学〉的体裁を施されつつほぼ完全に整序された形で主張されている。かのJ. ロックが17世紀の末に政治思想的論説の一環として富＝経済的価値の源を明確に〈労働〉に求め、「所有権」＝私有財産権を基礎づけようと意図し、W. ペティが賃料としての地代を究明する過程において経済学説としての労働価値論を萌芽的に展開して以来、〈労働〉に対する人々の関心は生活世界にその根をはってきていた。その時代の支配的な雰囲気や、I. イリイチは、たとえば、次のように紹介している。

「フランス革命のほぼ12年前にあたる1777年に、フランス北東部のシャロン・シュル・マルヌのアカデミーは、次のような問題について最良の処置を求める懸賞論文を課した。それは、王権を利し、しかも貧しい者にも利益となるようなやり方で、物乞いの蔓延をいかにして回避することができるか、という問題である。この問題提起には、困い込みの時代に急増した物乞いや産業化以前の状態、ブルジョアの価値観などが映し出されている。それには

## 商品関係と〈労働〉の抽象性（Ⅰ）（岡林）

また、貧困のあらたな経済的意味が映し出されている。すなわち、貧困は力ある者に対立するものではなく、金をもった者に対立する状態となってあらわれている。この懸賞論文の賞は、冒頭つぎのように命題を要約した論文に与えられた。——『数世紀にわたって、人々は知恵の石をさがしもとめてきた。それをわれわれは発見した。労働（work）である。賃労働こそは、貧しい者が豊かになるための本来の源である。』／……／このテキストにはまた、社会理論にたいする錬金術の思想の影響が映し出されている。ここでは労働は、知恵の石、治療の女神パナケイア、触れると金に転じる魔法の錬金薬として提示されている。自然は、自然を変質させる労働と接触することによって値段のつく商品とサービスになる。」（Ⅰ．イリイチ<sup>10</sup>）

ここには、〈労働〉をめぐっての新たな時代の胎動が看取されうる。それ自体としての〈労働〉という概念は超歴史的に存在していたのではない。〈労働〉は「発見」されたのである。それまで人々は伝統的社会の中で、〈労働〉していたのではなく、あらかじめ定められた身分的秩序に基づいてその役割を果たしていたにすぎない。領主は領主として、農夫は農夫として、父親は父親として等々、それぞれの社会的役割としての〈仕事〉を遂行していたのであって〈労働〉していたのではない。〈労働〉者という名の社会的あり方は存在していなかったのだ。今村仁司氏は、ミシェル・カルチェを引用しつつ、未開社会の様相に託して古典派ならびに〈近代〉を相対化しようとしている。

「『未開の労働は人間の疎外された労働でもなければ、社会的在り方から分離されているのでもなく、非人格的な労働力の単位として取り引きされるのでもない。ひとは労働し生産するが、その仕方は社会的人格としてそうするのである。例えば、配偶者として、父や兄弟として、リーニッジの親類縁者として、氏族や村落のメンバーとして……。労働する者であるということ、ひとつの身分ではないし、労働というものは部族経済の現実のカテゴリーでもない。』」（Michel Cartier, ed., *Le travail et ses représentations.*）

「近代資本主義経済の下では、労働の生産物は商品として交換される。商品交換の比率は、古典経済学の立場に即してみれば、生産物に投入された労働



（時間）量に応じて決まる。……近代的な労働を純粋な量として表象し、さらに労働が他の社会的行為から切断された独自の実体として考えている。ところが、未開社会にはこのような労働表象は存在せず、したがって、量としての労働も単独の実体としての労働も存在しない。いかにも未開社会には生存に必要なものを生産する活動は存在するが、その活動を近代人のようにには了解していない。」<sup>⑩</sup>（今村仁司）

商品の〈価値〉の〈実体〉をめぐる動きは〈労働〉以外にも〈土地〉＝〈自然〉や〈希少性〉や〈効用〉やをそれとして提出しようとする諸潮流を加えて、いわゆる価値論論争として長期にわたって展開されることになる。決定的なことは、しかし、時代が人々をしてあらかじめ定められた〈身分〉＝〈役割〉から商品所有者として自立＝自律した〈個〉（＝〈主体〉 subject, assujettissement ↔ subjectivation）へと不可避的に押しやり突き動かした点にある。人々はそのにおいて他者との比較＝計量を通じて自己の社会的アイデンティティを確認するしかない。時代は、人間の力を比較＝計量可能な同質性において把握することを要求したが、この同質性の認識においてマルクスはスミスやリカードに対して決定的な異見を提出したのである。

## 注

- ⑧ A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* (1776), ed. by E. Cannan, 1950, vol. I, p. 32, p. 32, p. 38. 大内兵衛／松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫, 1959年, (一), 150頁, 151頁, 163頁。
- ⑨ D. Ricardo, *On the Principles of Political Economy and Taxation* (2nd ed. 1889), in P. Sraffa and M. Dobb (ed.) *Works and Correspondence of David Ricardo*, vol. I, 1951. p. 12, pp. 13-14. 堀経夫訳『経済学および課税の原理』（『リカード全集』第1巻）雄松堂書店, 1972年, 14-15頁, 15-16頁。
- ⑩ I. Illich, *Shadow Work*, Marion Boyars, 1981. 玉野井芳郎, 栗原彬訳『シャドウ・ワーク』岩波書店, 1982年, 201-202頁。
- ⑪ 今村仁司『仕事』弘文堂, 1988年, 3-5頁。なお、本文中での〈仕事〉と〈労働〉との区別は、接していた山村の人々が〈仕事〉と〈稼ぎ〉とを区別していた、という内山節氏の発言とも重なる。（内山節『自然と労働』農山漁村文化協会, 1986年, 『自然と人間の哲学』岩波書店, 1988年）内山氏は、〈仕事〉⇒使用価値を生産する〈労働〉＝広義の〈労働〉, 〈稼ぎ〉⇒商品価値を生産する〈労働〉＝狭義の〈労働〉

## 商品関係と〈労働〉の抽象性（Ⅰ）（岡林）

働〉、という区別へと敷衍し、〈労働〉の狭義のそれから広義のそれへの転回を主張する方向性を打ち出している。つまり、〈仕事〉と〈労働〉との区別ではなく、〈労働〉それ自体を広狭両義に解釈しているのである。一方、今村氏の場合は〈労働〉それ自体からの解放を主張している。両者の目指している方向は、言葉の違いだけで、同じであるのかもしれない。どちらにしろ、まずは、それからの転回なり解放なりを思念させるところの狭義の〈労働〉や〈労働〉それ自体というものが登場し拡大し支配的になって来ざるを得なかった必然的な状況を理解しなければならない。誰かの〈悪意〉によってそれらは生まれてきたのではないからである。一部の人々の〈善意〉によってそれらはなくなるものではないからである。

### 3 商品の二要因と〈労働〉の「二面的性質」

「商品価値の形態では、すべての労働が同等な人間労働として、したがって同等と認められるものとして表現されているということを、アリストテレスは価値形態そのものから読みとることができなかったのであって、それは、ギリシアの社会が奴隷労働を基礎とし、したがって人間やその労働力の不等性を自然的基礎としていたからである。価値表現の秘密、すなわち人間労働一般であるがゆえの、またそのかぎりでの、すべての労働の同等性および同等な妥当性は、人間の同等性の概念がすでに民衆の先入見としての強固さをもつようになったときに、はじめてその謎を解かれることができるのである。しかし、そのようなことは、商品形態が労働生産物の一般的な形態であり、したがってまた商品所有者としての人間の相互の関係が支配的な社会関係であるような社会において、はじめて可能なのである。アリストテレスの天才は、まさに、彼が諸商品の価値表現のうちに一つの同等性関係を発見しているということのうちに、光り輝いている。ただ、彼の生きていた社会の歴史的な限界が、ではこの同等性関係は『ほんとうは』<sup>⑫</sup>なんであるのか、を彼が見つけだすことを妨げているだけである。」（K. マルクス）

マルクスは、ここで、アリストテレスの限界を、時代に制約された「同等性関係」に対する認識の限界として指摘している。我々が注意しなければならないことは、実は、この先にある。

## 商品関係と〈労働〉の抽象性（Ⅰ）（岡林）

アリストテレス的な時代の制約を解除されているはずであるスミスやリカードウにおいては、では、果たして、この「同等性関係」=同質性が『『ほんとうは』』なんであるのか」が本質的に明確化されているのであるかどうか、という問題である。

「商品に含まれている労働の二面的な性質は、私がはじめて批判的に指摘したものである。この点は、経済学の理解にとって決定的な跳躍点である…<sup>⑬</sup>…。」（K. マルクス）

マルクスもスミスやリカードウたちと同様に商品の〈価値〉の〈実体〉を〈労働〉、すなわち「同等な人間労働」に求めた。彼らは共にアリストテレスとは異質な時代、「同等な人間労働」が語れる時代に生きていることの証明である。マルクスとの違いは、スミスやリカードウが「労働の二面的な性質」について語らなかったことである。抽象的人間労働と具体的有用労働との区別という点に関して彼らは無頓着であり、〈労働〉をわざわざ二つの概念に区分することなど思いもよらなかった。

いわゆる商品の二要因＝「二面的な性質」、（交換）価値と使用価値との区別には言及しているのであるから、スミスやリカードウが「労働の二面的な性質」を指摘することは形式論理的にいと簡単に思える。それをしなかったしでなかったという事態は、（交換）価値と使用価値の区別の仕方もしくは〈労働〉の位置づけのどちらか、または両方にその原因があることを示唆している。

〈価値〉と使用価値との区別からみていこう。（交換）価値と使用価値とをスミスたちは区別している、と我々は述べた。〈価値〉という表記ではなく、「（交換）価値」と表現したところに意味がある。商品の〈価値〉とは、スミスたちにとっては〈交換価値〉と同義である。〈交換価値〉とは、先述したように、（他）商品の使用価値の一定量をその定在とする。〈交換価値〉という概念は、それ故、具体的な使用対象としての使用価値に半ば拘束されている。彼らの労働価値論が交換比率の問題において常に足をすくわれてしまう危険性を内蔵してしまうのも道理である。交換比率とは一面において優れて使用価値の連関問題（社会的な実物需要と実物供給の均衡問題）に他ならないからである。換言す

れば、〈交換価値〉は〈価値〉と使用価値との両方に片足ずつ突っ込んで始めて成立している概念なのだ。マルクスは、創出された（総）価値の平均利潤率下での分配問題として自由競争場における交換比率を位置づけた。つまり、あくまでも（総）価値が下地にあり、使用価値連関としての交換比率のレベル設定はその上での線引きの問題として処理し、〈価値〉—〈交換価値〉—使用価値の重層性に着目する方向性を示したのである。労働力概念の欠如に起因する支配労働価値説と投下労働価値説との混在＝併立不能性から構成価値説へのスミスの論点移動の問題や、「労働の価値」（賃金）と「労働の量」との混同を指摘することによって支配労働価値説を否定し、投下労働価値説の徹底貫徹を主張しつつスミスを論難したリカード自身の投下労働と〈日付のある労働〉との間での不変の価値尺度ならびに絶対価値を求めての動揺という事態は、〈価値〉と〈交換価値〉と使用価値との区別の非厳密性にその原因の一端がある。同様のことが、実は、〈労働〉概念に関してもいえるのである。

スミスやリカードが述定している〈労働〉概念は、〈価値〉を生産するそれではなく、一定の交換比率連関の中に置かれた使用価値を生産する〈労働〉の側面に引き寄せられている。分業のもたらす物質的生産力の飛躍的増大に注目するスミスに見えている〈労働〉とはほとんど常に個別＝具体的なそれである。ビーバーや鹿を捕まえる〈労働〉であり、ピンを製造する〈労働〉等々である。具体的有用労働しか本質的には見ていない。土地や資本（stock）に対する報酬を〈労働〉に対する報酬と共に〈価値〉を構成する要因として計上するスミスの姿勢は、〈使用価値—具体的有用労働〉の磁場に彼が留まっていることを如実に証明している。使用価値物の生産という面から見れば、自然も資本（stock）も〈労働〉と共に寄与していることは自明である。商品の〈価値〉を生産する〈労働〉の抽象性は、〈労働〉者という名の抽象性は、しかしながら、その視界に登場してこない。リカードウにあっても同断である。「商品価値の形態」に「表現されている」ところの労働の「同等性関係」が指し示しているものが「『ほんとうは』なんであるのか」、というマルクスの提示した問いに答えうる方途は、論理の展開の仕方においてのみではなく、使用されている諸概

念の性格規定において既に、あらかじめ閉ざされてしまっている。

先の自負に加えて、マルクスは、古典派経済学の体質的難点を次のように指摘している。

「古典派経済学の根本欠陥の一つは、商品の、また特に商品価値の分析から、価値をまさに交換価値となすところの価値の形態を見つけたすことに成功しなかったということである。A. スミスやリカードのような、まさにその最良の代表者においてさえ、古典派経済学は、価値形態を、まったくどうでもよいものとして、または商品そのものの性質には外的なものとして、取り扱っているのである。その原因は、価値量の分析にすっかり注意を奪われてしまったということだけではない。それは、もっと深いところにある。労働生産物の価値形態は、ブルジョア的生産様式の最も抽象的な、しかしまた最も一般的な形態であって、これによってこの生産様式は、社会的生産の特殊な一種類として、したがってまた同時に歴史的に、特徴づけられているのである。それゆえ、この生産様式を社会的生産の永遠の自然形態と見誤るならば、必然的にまた、価値形態の、したがって商品形態の、さらに発展しては貨幣形態や資本形態などの独自性をも見そこなうことになるのである。」

<sup>⑭</sup>  
(K. マルクス)

「価値形態を、まったくどうでもよいものとして」「商品そのものの性質には外的なものとして、取り扱って」しまうことによって、資本主義的生産様式を「社会的生産の永遠の自然形態」と錯認し、商品形態、貨幣形態、資本形態の「独自性」を看過してしまったら、商品価値の実体を分析する眼も曇ってしまうことは必至である、とマルクスは述べている。価値形態論的視座を本質的に欠落させているということは、〈労働〉の抽象性にまでその射程が及んでいないということと同義である。以下、価値実体としての人間労働の特殊性を、まずは、商品交換に即して解明＝規定しておく。商品（＝貨幣）関係において示される、かの「同等性関係」の本質の具体的様相もまた、そこにおいて明らかになるはずである。

## 商品関係と〈労働〉の抽象性（Ⅰ）（岡林）

### 注

⑫ Marx, op. cit., S. 74. 邦訳前掲書, 81頁。

⑬ Ebd., S. 56. 同上, 56頁。

⑭ Ebd., S. 96. 同上, 108頁。なお、スミス、リカード等が〈使用価値—具体的有用労働〉の磁場に留まっている、という点に関しては、我々とは違った文脈においてではあるが、今村仁司氏が指摘している。今村仁司『労働のオントロジー』勁草書房、1981年。例えば、pp. 222-3。

## 4 社会的＝平均的必要労働と抽象的人間労働

商品関係が支配的になるにつれて〈労働〉ならびに〈労働〉者が登場してくる。その際、〈労働〉は具体性と抽象性とを伴ってその姿を現わしてきた。具体性は使用価値を生産するものである以上、当然付随する。抽象性の方は〈価値〉と絡み合うが故にやや複雑な様相を呈する。抽象性とは無名性でもある。

〈労働〉は、それ故、様々なものと結びつく。人間だけではなく、自然も、動物も、機械もが〈労働〉することが可能となる。領主は領主、鍛冶屋は鍛冶屋、農夫は農夫、牛は牛、馬は馬、等々としてではなく、すべからく〈労働〉するものという範疇に囲い込むことが可能となるのである。〈労働〉の抽象性はこのような側面を保持しつつも、〈価値〉を生産するのは〈労働〉者という名の抽象性に限られる。人間の〈労働〉が全く不必要になれば（貨幣概念を導入すれば、労働力の対価としての収入がなくなるということ）、使用対象としての財を消費する主体は存在しても商品としてのその価値を実現する行為そのもの（購買行為）が不可能となるからである。抽象的人間労働が商品の〈価値〉を産む所以である。

人間労働の抽象性をさらに検討する前に、〈対象化されている人間労働〉ならびに社会的＝平均的必要労働という概念についてありうべき誤解をあらかじめ封じておくために、若干の説明を補足しておく必要がある。

ある同一種類の商品を生産するのに、たとえば、A君は5時間投下し、B君は6時間を要したとする場合、無論、A君は当該商品に5時間の労働を対象化

し、B君は6時間の労働を対象化した、と述べたとしても決して誤りではない。この両者の生産した商品が他の種類の諸商品との交換の場に登場する時には、しかしながら、A君の対象化した5時間はそのまま5時間としては通用しえないし、B君の場合も同様である。それらは、ある一定水準の社会的平均的に必要な労働時間（の対象化したものとしての商品）へと還元されざるをえないのである。〈対象化されている人間労働〉は、私的なそれから社会的なそれへと、まずは、評価替えされるのである。

「諸価値の実体をなしている労働は、同じ人間労働であり、同じ人間労働力の支出である。……個別的労働力のおのおのは、それが社会的平均労働力という性格を持ち、このような社会的平均労働力として作用し、したがって一商品の生産においてもただ平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間だけを必要とする限り、他の労働力と同じ人間労働力なのである。社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的に正常な生産条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、なんらかの使用価値を生産するために必要な労働時間である。……／…ある使用価値の価値量を規定するものは、ただ、社会的に必要な労働の量、すなわち、その使用価値の生産に社会的に必要な労働時間だけである。個々の商品は、ここでは一般に、それが属する種類の平均見本とみなされる。」（K. マルクス<sup>⑮</sup>）

〈対象化されている人間労働〉が、私的＝「個別」的なものから社会的＝平均的なものへと不可避免的に還元される、「もしくは、個別的労働力のおのおの」は「現存の社会的に正常な生産条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度<sup>⑮</sup>」とを體現しつつ社会的欲望＝需要に対応する限りにおいてのみそのアイデンティティーを確保しうるべく定められている、とマルクスは述定している。

誤読されうる可能性を内包している文言とは、一見、思えない。こころして読まなければ、しかしながら、思わぬ落とし穴が用意されている。社会的＝平均的必要労働と抽象の人間労働との混同、すなわち、これである。

社会的＝平均的必要労働という概念においては、〈対象化されている人間労働〉は、その具体的有用性の側面を依然として保持し続けている。A君という

## 商品関係と〈労働〉の抽象性（Ⅰ）（岡林）

個性を刻印されている5時間の（対象化された）労働時間は、「社会的平均労働力という性格を持ち、このような社会的平均労働力として作用し、したがって一商品の生産においてもただ平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間だけを必要とする限り」での「他の労働力と同じ人間労働力」へと、確かに、還元されてはいる。B君の6時間も同様である。この還元は、しかしながら、異なった種類の他の諸商品との交換を通じて行なわれるとはいえ、あくまでも同一種類の商品を生産＝供給する同一部門内部の事態として把握されなければならない。A君という個性、B君という個性は消去されているとしても、ある特定種類の商品＝使用価値を生産するという労働の特性は決して捨象されきってはいないのである。

「社会的生産の全体を担うものは、『社会の総労働力』であり、その『社会の総労働力』を構成するかぎりでは、種々の個別的労働力は一個同一の社会の総労働力の一分枝として、価値形成の実体としての『人間的労働力』であり、『社会的平均労働力』として規定される…。」

「あらゆる個性や私的性格のもとにおける人間的労働力全体が、『社会の総労働力』として総体的に把握され、総体という坩堝をとおしてみるならば、それら個々の人間的労働力におけるいっさいの相違が捨象され、人間的労働力は『社会的平均労働力』として作用するものとして規定されることになる…。」（高木<sup>⑰</sup> 彰）

社会的＝平均的必要労働に還元された個々の私的＝個別的労働が、「社会の総労働力の一分枝」を構成し、担うものとして位置づけられることは明らかにその通りである。「社会の総労働力」とは、しかし、使用価値的需給連関に規定されつつ、生産部門が異なるにしたがって様々に相違する具体的有用性を持った諸労働力によって構成されているものである。A君やB君やC君や等々の私的＝個別的な労働が社会的＝平均的必要労働に還元されているからといって、「総体という坩堝をとおしてみるならば、それら個々の人間的労働力におけるいっさいの相違が捨象され」ていると、高木氏のように決して断定できないし、してはならないのである。



社会的＝平均的必要労働を措定＝形成するプロセスは、抽象的人間労働を措定＝形成するそれとは、無論、市場という場において事実的には重なり合いつながりながらも、概念的には明確に区別しておかなければならない。「諸価値の実体をなしている労働は、同じ人間労働であり、同じ人間労働力の支出である」とマルクスが述べている場合の、「諸価値の実体をなしている」ところの同質的人間労働＝抽象的人間労働なるものは、社会的＝平均的必要労働の形成の場において措定されるレベルでの使用価値連関に引き付けられた労働の同質化を前提的に含み込んでいるとしても、その本質的規定において、そこに解消されてしまってはならない概念なのである。次のような高木氏の発言には、故に、素直に首肯するわけにはいかない。

「価値形成の実体が、単なる人間的労働力から一步進んで『社会的平均労働力』として規定されるにいたっている…。そこでは、『個別的労働力』が、一方では『人間の脳、筋肉、神経、手などの生産的支出』…であるという点において、他方では『社会の総労働力』を構成するものであるということにおいて、『社会的平均労働力』に還元されているのである。それこそがマルクスの前提とした使用価値の捨象<sup>18</sup>ということによって得られる帰結の具体的な内容に他ならないのである。」（高木 彰）

「具体的」に「一步進」む前に、「マルクスの前提とした使用価値の捨象」ということによって得られる帰結」を再点検する必要がある。「使用価値の捨象」ということによって得られる帰結」であるところの抽象的人間労働と社会的＝平均的必要労働との概念的差異を明確化するためにも、そのことは必須の作業である。

両者の決定的差異は、論点先だりの述べてしまえば、次のように提示される。

社会的＝平均的必要労働という概念は具体的な労働時間を——事後的＝分析的にはあれ——保有するが、抽象的人間労働という概念は、具体的な労働時間を捨象し抽象化したところで成立するものであること、これである。

抽象的人間労働の成立機構を視図に入れつつ、以下、この点を敷衍化してい

くことにしよう。

## 注

⑮ Marx, op. cit., S. 53. 邦訳前掲書, 53頁。

⑯ 「自分の生産物によって自分自身の欲望を満足させる人は、使用価値はつくるが、商品をつくらない。商品を生産するためには、彼は使用価値を生産するだけではなく、他人のための使用価値、社会的価値を生産しなければならない。{しかも、ただ単に他人のためというだけではない。……商品になるためには、生産物は、それが使用価値として役立つ他人の手に交換によってうつされなければならない。}……どんな物も、使用対象であることなしには、価値ではありえない。物が無用であれば、それに含まれている労働も無用であり、労働のなかにはいらず、したがって価値をも形成しないのである。」(Marx, ebd., S. 55. 同上, 55—56頁) 第三卷第三十七章における「別の意味を含む」「社会的必要労働時間」の規定が、この点に関しては、さらに、参照されるべきであろう。ただし、価値を形成する実体の質と特定の使用価値を生産する技術の布置構造と、さらには、使用価値の社会的な需給連関に規定された価値の量的水準（交換価値）との区別が肝要である。

⑰ 高木彰『市場価値論の研究—市場価格論序説—』岡山大学経済学研究叢書 第1冊, 1982年, 14頁, 15頁。

⑱ 高木彰, 同上, 14頁。

## 5 — a 抽象的人間労働の存在様相

かのバーム・バヴェルクによって〈蒸留法〉と命名された<sup>⑲</sup>悪名高きマルクスの論法から、我々は何を読みとるべきなのか。論証の名に値しない杜撰な先走ったもので、それはあるのか。マルクスの文言に、まずは耳を傾けてみよう。

「1クォーターの小麦 = a ツェントナーの鉄……この等式はなにを意味しているのか？ 同じ大きさの1つの共通物が、2つの違った物のうちに、……存在するということである。だから、両方とも或る1つの第三のものに等しいのであるが、この第三のものは、それ自体としては、その一方でもなければ他方でもないのである。」

「諸商品の諸交換価値は、それらがあるいはより多くあるいはより少なく表わしている1つの共通なものに還元されるのである。／この共通なもの

は、商品の幾何学的とか物理学的とか化学的などというような自然的な属性ではありえない。……諸商品の交換関係を明白に特徴づけているものは、まさに諸商品の使用価値の捨象なのである。この交換関係のなかでは、ある1つの使用価値は、それがただ適当な割合でそこにありさえすれば、ほかのどの使用価値ともちょうど同じだけのものと認められるのである。」

「互いに区別されること…（のない）…ことごとく同じ人間労働…抽象的人間労働…／…まぼろしのような対象性…無差別な人間労働の、すなわちその支出の形態にはかわりのない人間労働力の支出の、ただの凝固物……。これらの物が表わしているのは、ただその生産に人間労働力が支出されており、人間労働が積み上げられているということだけである。このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として、これらの物は価値——商品価値なのである。」（K. マルクス<sup>②</sup>）

A商品 x 量 = B商品 y 量という交換等式が、まさに等式として厳密な意味において成立するためには、異質な両商品が同質の単位をもったものに還元されていなければならない。それぞれが、ある共通の単位をもった比較計量可能なものに還元されてはじめて、この等式が等式としての意味を充たす。3 cm と 5 kg とでは比較計量できない。長さなら長さ、重さなら重さ、どちらかに統一しない限り等式関係に持ち込めないこと自明である。

「使用価値は捨象」されている、とマルクスは言っている。商品交換の当事者の使用価値に対する欲望は捨象されているということだ。欲望を導入してこの等式を説明できないこともないが、その際には、自分の所有している商品に対する所持量を加味した欲望度と相手商品に対する同様の欲望度が当事者それぞれにおいて比較計量され、相互に折り合ったところでこの等式が成立することになる（限界効用逓減法則から導出された無差別曲線というシェーマ）。商品所有者は、しかし、商品関係が支配的な社会にあっては自己の商品に対して使用対象としての欲望は原理的に抱いていない。商品所有者にとって自己の提供する商品は交換対象であって使用対象ではない。つまり、相手商品の使用価値に対する欲望はもちろん存在していると仮定してさしつかえないが、それを

商品関係と〈労働〉の抽象性（Ⅰ）（岡林）

自分が持っている商品に対する自己の欲望と比較計量することによって交換を遂行するのではないのだ。欲望度の相互比較という設定は、それ故、排除されなければならないのである。さらに、本稿1で述べた伝統的社会における財の交流と商品関係の支配的な社会における〈価値〉概念の保有している役割との差異を想起してほしい。

使用価値を捨象した位相に話を戻そう。

ある共通の単位をもったもの、マルクス言うところの「第三のもの」＝「商品の幾何学的とか物理学的とか化学的などというような自然的な属性」を捨象された第三者は、商品交換関係の外側から与えられるのではない。商品交換関係そのものがそれを孕んでおり、後に貨幣として可視化するものである。この第三者をマルクスは「ことごとく同じ人間労働」、「まぼろしのような対象性」、「無差別な人間労働」、「その支出の形態にはかかわりのない人間労働力の支出」、すなわち〈抽象的人間労働〉として措定している。〈労働〉こそが商品の〈価値〉の「原理」であるというヒルファードァングの次のような発言も参考にされるべきであろう。

「…労働が価値の原理であり、そして価値法則が現実性をもつのは、労働が、原子にまで分解されている社会を結びつける社会的紐帯にほかならないからであって、労働が技術的に最も重要な事実であるからではない。マルクスは…社会的必要労働を出発点とすることによって、私有制と分業とを基礎とする社会の内面的機構を暴露することができた。かれにとっては、人間と財貨とのあいだの個人的関係は前提されている。交換のうちにかれが見出すものは、個人的な価値評価の差異ということではなくして、歴史的に規定された生産関係の同等性である。この生産関係においてのみ、人格的關係の象徴として、その物的表現として、社会的労働の担い手として、財貨は商品となる。」（R. ヒルファードァング<sup>②</sup>）

「社会的必要労働を」マルクスが「出発点と」した、という観点に対しては異論があるが、その点については先に関説したのでここでは触れないことにする。

ヒルファードィングの論調において評価しうる点は、〈労働〉を歴史的関係の関数として捉えていることである。〈労働〉や分業（＝division of “labor”）を歴史貫通的に実体化したうえで物的富の増大＝富裕化に果たすその役割の重要性に鑑みて「労働が技術的に最も重要な事実である」などと主張する立場を、彼は、ひとまず、批判的に相対化しており、さらに、「歴史的に規定された生産関係の同等性」に着目している。

社会を構成する一原子＝無名〈個〉として分断化されつつ位置づけられながらも、商品（＝貨幣）関係の中で生きている人々は、〈労働〉者として、〈労働〉を日常的基軸としながら連結されている。この紐帯たる〈労働〉は、商品（の価値）関係を通じてしかその社会性＝社会的アイデンティティを表現＝実現できず——抽象化——、〈労働〉と商品とのこのような関係が不可避的に生成せざるをえないところの社会性の可視化された物神として貨幣が登場してくるのである。

普遍的＝歴史貫通的な実体としての人間労働とその協業的＝分業的連関とが諸商品の価値関係の基底に横たわっているということを分析的＝科学的悟性の眼をもって開示しえた、などという点にマルクスの労働価値論の発展させるべき特質を解消する態度＝搾取一元論的資本主義批判は根本的に誤っている。自己の価値や意味をそれ自体の深化を通じて獲得することを前提的基礎としつつ、社会と自己との無限の往還運動を発条としてさらに自己を豊富化するという回路、このような回路をあらかじめ閉ざされたまま他者＝他物の一定量をもってしか自己の価値を表現＝実現できないというような関係の負性——疎外＋物象化——を開示する理論としてこそマルクスの労働価値論はその十全な役割を果たしうるものなのである。

〈労働〉＝抽象的人間労働こそが商品価値の実体、すなわち、諸商品の交換関係を通じて実現される社会的関係の基底的紐帯の実相であることを以上のように理解したうえで、再びマルクス（交換）価値等式に戻ることになろう。

この等式的関係の中で抽象的人間労働という概念が措定されることになる。ここでは次の点を理解することが決定的に重要である。ある一商品の価値の実

## 商品関係と〈労働〉の抽象性（Ⅰ）（岡林）

体であるところの抽象の人間労働は当該商品に対象化されている社会的必要労働の具体的な一定量をもってしては表わすことができないということ、それは他商品の社会的＝平均的必要労働の一定量をもってしか表現することのできない抽象物であるということ、これである。

起こりうるであろう誤解を、あらかじめ封じておこう。

A商品  $x$  量 = B商品  $y$  量という価値等式において、A商品に5時間の社会的平均労働が対象化されており、B商品も同様に5時間の社会的平均労働が対象化されている場合、まさに等価交換が成立し、両商品に共通のこの5時間の社会的＝平均的必要労働が抽象の人間労働そのものであるかのように理解されることが一般的パターンであるように思われる。このような理解の仕方では、しかしながら、抽象の人間労働なる概念の特質を完全に見誤っていると言わざるをえない。抽象の人間労働が具体的な労働の一定量として——この場合5時間——、事後的＝分析的にではあれ、明示化されうるものとして把握されている。事後的にも、分析的にも、だが、商品の価値の実体たる抽象の人間労働は一定量の労働時間としては自体的に表現されえないものなのである。それこそが、商品の価値の特質であり、同時に、価値の実体の最大の特徴なのである。

換言すれば、次のように言える。

A商品  $x$  量 = B商品  $y$  量という等式によって、前者、すなわちA商品  $x$  量には社会的＝平均的必要労働が5時間対象化されており、後者、すなわちB商品  $y$  量には社会的＝平均的必要労働が8時間対象化されている場合も、無論、等価交換が成立している。ということである。5時間の労働を体化している（と社会的＝平均的には見做され評価替えされている）A商品と、同様に8時間の労働を体化している（と社会的＝平均的には見做され評価替えされている）B商品との交換が、等価交換として遂行されるとき、5時間の労働と8時間の労働とが等しい人間労働として抽象化されているのである。「商品の幾何学的とか物理学的とか化学的などというような自然的な属性」、すなわち使用価値的側面、それ故同時に労働の具体的＝有用的側面の一切を捨象された抽象の人間労働というものが、ここにおいてはじめて成立＝措定されるのである。抽象的

人間労働は、この場合、一定の具体的労働時間では表示されえないところの或る第三者としてのみ存在しているのである。A商品を相対的価値形態の立場に置けば、A商品に対象化されている5時間労働が、等価形態にあるB商品に体化している8時間労働に等しいものとして見做されているのであり、逆の場合は逆。商品の価値が他商品の使用価値でしか表わされえないことと同様に、つまりは、商品価値の形成実体である抽象的人間労働は他商品に対象化されている一定の社会的＝平均的必要労働時間をもってしか表現されえないのである。価値と抽象的人間労働なる概念の、これが本質規定である。

一般的等価形態（＝貨幣形態）が登場してくる段階になると、価値ならびに抽象的人間労働は、例えば金の一定量（貨幣額）ならびに、それを通じて分析的＝事後的に、金に体化している社会的＝平均的必要労働時間でもって表示されうることになる。金の体化している労働は、しかしながら、抽象的人間労働の具現化ではあっても抽象的人間労働そのものではなく、その身代わりでしかない、ということを肝に命じておく必要がある。

再言しておこう。

他の商品の使用価値の一定量に等しい量、他の商品の生産に社会的＝平均的に必要な人間労働の一定量に等しい量としてしか表現不能な、それ故、物象化された関係の内では自己表現されえず、存在しえないような〈人間〉＝〈労働〉の特殊＝歴史的かつ社会的な存在態様を如実に反映している概念として、商品の価値ならびに価値実体であるところの抽象的人間労働に拮定されなければならないのである。価値ならびに抽象的人間労働（＝第三者）は関係規定であり、自己に対象化されている社会的＝平均的必要労働時間による自体的な自己表現、自体的な自己実現の方途はあらかじめ閉ざされてしまっているのである。

本稿3において提起しておいたところの問題、すなわち、商品（＝貨幣）関係下における〈同等性〉問題——「商品価値の形態」に「表現されている」ところの「同等性関係」が指し示しているものが『ほんとうは』なんであるのか、という問題——に対する解答が、ここにおいて明確に示されていると言っている。「商品に含まれている労働の二面的な性質」、就中、抽象的人間労働概

## 商品関係と〈労働〉の抽象性（Ⅰ）（岡林）

念の批判的剔抉の意義を「経済学の理解にとって決定的な跳躍点である」と論定したマルクスは、確かに〈経済学〉体系ならびに資本主義社会の論理的＝歴史的生誕の地点へと肉薄しえていたと言わざるをえない。かの〈蒸留法〉もまた、資本主義的〈同等性〉関係の疎外＝物象化的本質の剔出のための第一段階と考えれば、その戦略的位置づけにおいて不可解かつ杜撰な論証などでは、決してないのである。

以上、社会的＝平均的必要労働と抽象的人間労働との概念的峻別にに基づきつつ論を展開してきた。その必要性はおおむね了解されえたと思われるが、商品の等価交換＝等労働量交換なるものを自体的表現不能の抽象的人間労働との関連において捉えることの重要性を改めて確認しておきたい。繰り返しになるが、再言しておく。社会的＝平均的必要労働として認められた同量の労働が対象化されている商品同士の交換が等価交換＝等労働量交換なのではない、ということ、これである。5時間と5時間の交換、8時間と8時間との交換が等価交換＝等労働量交換なのではないのである。5時間と8時間との交換であっても、それらが諸商品の再生産における均衡的連関の下で等しい労働時間と見做されるかぎり——これが〈労働〉の抽象化であった——、その交換は等価交換＝等労働量交換なのである。

簡単な算術を使用して、以下、補足しておこう。

### 注

- ①⑨ E. von Böhm-Bawerk, *Zum Abschluß des Marxchen Systems*, in "Staatswissenschaftlichen Arbeiten", Wien, 1896. 木本幸造訳『マルクス体系の終結』未来社, 1969年。
- ②⑩ Marx, op. cit., S. 51, S. 51-52, S. 52. 邦訳前掲書, 50頁, 51頁, 52頁。
- ②⑪ R. Hilferding, *Böhm-Bawerks Marx-Kritik*, Marx-Studien, Bd. I, 1904, S. 12. 玉野井芳郎／石垣博美訳「ベーム・バヴェルクのマルクス批判」『マルクス経済学研究』法政大学出版局, 1955年, 147頁。